

## 古い思い出

楠 幸男

(昭23年卒 名誉教授)

ここでは、今年90才になる私の古い学生時代の思い出と、私が数学教室のスタッフであった頃のエピソードの1つを書くことにしたい、昭和の語り部の1人の積りで。

旧制では中学校は5年、高校は3年であったが私が三高（京都の第三高等学校）に入学した昭和18年頃太平洋戦争の戦況が次第に厳しくなり、私の1年上の学年は就学期間が2年半に、私の学年はさらに2年に短縮された（早く兵隊がいるためである）。しかも私達はその2年のうち約1年程は農村や工場へ勤労働員にいった。そしてその2年目の後半、急に翌年4月の国立大学の入試は取りやめになり合否は成績の内申だけで決められることを知らされた。

私は三高の1年生のとき寮にいたが、そこは人生勉強が主で人生や哲学を論じ寮歌を歌うところで、学校の勉強ばかりする奴は軽蔑されるような雰囲気であったから私も授業の勉強は余りせず低空飛行で2年に進んだ。ところが2年の後半、私達は大阪の工場へ住み込みで勤労働員になりもう授業はなくなったから、急に来年の大学入試が内申だけといわれても成績の悪い者はもう頑張りようもなく私も半分諦めていたが、京大理を希望して第2志望で幸い数学科に入学させて貰えることになった。

勤労働員を終えて大阪の実家に帰り4月を楽しみにしていたところ、その3月13日、今年70周年を迎えた「大阪大空襲」に遭ったのである。夜半空襲警報が鳴り道路脇の防空壕に入った。防空壕は沢山あったが名ばかりで3人も入れれば一杯だから家族は2つに分かれた。米軍B29による絨毯爆撃（隙間なく爆弾投下のこと）である。火が迫ってきたと思った途端近くに焼夷弾が落ちた。幸い直撃は免れたが家は瞬時に焼け落ちた。私は割に冷静だったようで、壕をでるタイミングと逃げる方向（風上）を考え母と妹をつれて火の海を逃げて助かり、また行方の分からなかった父や他のきょうだとも中之島の中央公会堂で会えた。後の新聞によればその時のB29は274機、死者約4600人、被災者約50万人とか。

そのようなことで私は本もノートもないが4月中頃数学教室にゆけば授業は始まっていて皆ノートをとっていた。講義は目新しく勉強の意欲がわいたがそれも東

の間、6月頃からは舞鶴へ勤労働員だ。港湾の運搬作業はきつかった。ある時私を含め多くの学生(理、医学部)が疫痢にかかり近くの隔離病棟にいれられた。そして治ったかどうか分らぬ間に京都に送り帰された。当時京都も爆撃されるかも知れないというので疎開した人もあり空家や借家があったらしく、両親は伏見区(以前は伏見市)にある小さい借家に住んでいたので私は舞鶴から送り返されたとき、とにかく帰る家があったのは幸いだった。そうして8月15日を迎えたのであった。

生活は苦しく身も心もボロボロで将来のことなど考えられない、いつそ死んだ方がましかと思う一方、理系の者は徴兵猶予があったが文系の人は兵隊にゆき戦死した人もいる。その点ではまだ生き残ったから、もう一度数学を勉強し研究もしてみたいという気持ちもでてきて、やっと12月頃に教室に行けば授業は始まっていて学生も大分出てきていた。このようなことで結局大学も3年のところ約2年程勉強して卒業した。これが私の学生生活であった。

なおその卒業の際、卒業試問(正式名称は知らない)があった。私の頃は全講座4人の教授の前に1人ずつ呼び出され試問があり黒板を使ってもよかった。私は連続とかほか少し聞かれたがパスした。話によれば人によっては教授の前に立つだけで上がってしまい、連続の定義で $\varepsilon$ と $\delta$ を反対にしてしぼられたとか。しかし試問の結果卒業できなかったという話は聞いたことはない。新制大学になってからはこの卒業試問はなくなり、卒業研究とかゼミという形になった。

次に私が在職時の思い出を1つだけ記します。恩師小堀憲先生の話によれば数学教室では主として若い教官に、時にその専門とは違う科目の講義をさせられる。例えば微分方程式が専門の岡村博先生が微分幾何学の講義を命じられたとか。ああそうですかと聞き流していた私の助教授時代のある学年末、4月から微分方程式を講義するよう命じられた。私は函数論(複素解析)を専門とし必死に研究していた頃であった。微分方程式は少しは知っていたが、これは大変と急ぎょ俄か勉強して臨んだ。昭和34年のクラスとその翌年のクラスの2年間である。学生諸君には実験台になって貰って申し訳ないと思いながら…鋭い質問せめもあったがとにかく終わった。ところが偶然であろうがこのクラスから後年微分方程式で業績をあげた松田道彦氏、望月清氏(昭和34)、島倉紀夫氏、坂本(旧姓有馬)礼子氏(昭和35)が輩出した。これは勿論諸氏の研究によることで講義とは関係ないが、あのときのことを思うとうれしく懐かしい。

同級生と同窓会(alumni)について

同窓生とくに同期生はほぼ同年齢で同じ志望をもち同じクラスに属したから互いに平等な関係で気楽につきあえる。さらに気が合えば交友が長く続くように思う。“類は友を呼ぶ”…。ところで東日本大震災以来、絆という言葉がよく使われるが、私が感じた同級生の絆を一二思い出してみた。

数学科の同期生に西田和夫君がいた。三高ではクラスが違ったから数学科でも最初知らなかったが、彼も大阪で戦災にあい、しかも終戦後私の伏見の実家に近いところに母と二人で住んでいることが分って急に親しくなり、互いに語り合い励ましあった。実際、彼がいなかったら私は立ち上がれなかったかも…またその後彼が大病の時私は見舞っては励ましたことを覚えている。同期生の松阪輝久君の友情も忘れ難い。

数学科で私より半年上の学年に溝畑茂さんと山口昌哉さんがいた。戦時中のことで、その学年とは合併授業もあったし大学院生時代、両氏とは3年程一緒に松本敏三先生のゼミに出席したこともあって仲良くなった。とくに溝畑さんとは同じ研究室で机を並べた上、気が合うというか心が安らぐ感じで交友は晩年まで続いた。

このたび、数学教室の同窓会が発足することになり慶賀に堪えないところであります。この準備のために尽力された井川満氏（昭和40年卒 名誉教授）、重川一郎教授、ならびに数学教員、数学事務室や図書室の職員の方々、そして協力していただいた発起人の皆様に厚く御礼申し上げます。

同窓会が事務的連絡のみならず、情報交換や旧交を温める機になればよいと思うところです。